

アマンダ・C・シーマン

『少子化日本の妊娠文学』

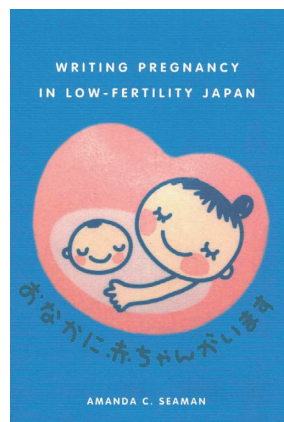
Amanda C. Seaman, *Writing Pregnancy in Low-Fertility Japan*

ビル・ミハロパウロス

戦後日本の「妊娠文学」を紹介する興味深い本が現れた。ス
ポットライトが当たるのは、母となる日を待つ日本の妊婦たちの
経験だが、これは今まで気づかれずにきた刺激的で独創的、挑発
的なジャンルだ。おまけにこの本は読み物として楽しい。切れの
良い、いきいきした文体で、専門用語もさほど多くない。言語の
複雑さへの感度の良さと、口語日本語の適切さも印象的だ。
ホラー、ファンタジー、短編、小説、回想録、マンガをつうじて
著者が誘う旅路は、学部生を刺激し魅了することだろう。

処女作において、さまざまな社会問題や懸念を扱う五人の作家
をとりあげた著者は、本書でも同じひな型を用いた。主軸となる
のは公言することできない嫌悪、つまりすべての母親が、生ま
れる前と後の赤ちゃんに喜びや愛情を感じるわけではないという

問題である。この本の最良の部分、それは女性の身体の根幹的変
容と、それに伴う心理的变化という経験を扱った箇所だ。妊娠中、
母体は急速に変化する。自分の身体が自分ではコントロールでき
ないものになってしまうという経験、しばしば完全に理解できな
い変化に恐怖と違和感を抱く未来の母親もいる。また、胎児が体
内で育ち、身体に密着するこの変身のあいだ、妊娠した身体は、
異物でもあり親密でもある侵入者の宿主になる。妊娠を侵入の一
形態として描く、この分野の文学があつかう恐怖はそもそも驚く
ほど主観的なものだ——つまり妊娠していることの恐怖と胎児の
発育の不確かさへの不安である。結果の不透明さと、「母親の行動
のみならず思考すらもが胎児の発育」と性格に影響するという
「胎内感応」のせいで、自分自身と他者との境界がどうほどけてい



University of Hawai'i Press, 2016

くかを、著者は妊娠の描写の中で追つていく (p. 48)。

最終章では、やはり予想どおり、日本研究の学部生なら誰の読書リストにも標準的に入っている、大胆不敵で型破りなアーティスト・文筆家の内田春菊が登場する。この章では、内田の公的ペルソナと、内田自身の妊娠や家庭生活の個人的な細部を描いたシリーズ漫画とが重なり合う。内田のユニークな点は、日本社会の不当な性差別について大胆な発言をする一方で、日本の初期フェミニストの唱えた反出生主義とは距離を置いていることだ。内田は出産をセックスから解放することが個人の自由につながることは考えていない。彼女が追求する個人的満足は、子孫を産まなければという欲求に駆られたものである。とにかく赤ん坊を産むこと——たくさん産めば産むほど良い——ただし、自分の思うがままに育てられるなら。内田の場合、それは何人もの父親の違う子供をもち、その過程で性的に完全に機能し、活動的であることを意味する。複数のパートナーとのあいだに子供を産むことを選び、出産プロセスを自分が管理し、母親を生まれてくる赤ん坊の容器にしない、妊娠した自分自身という観点を紹介することによって、内田は日本社会を覆う父権的規範に対して破壊的、反抗的な境界的社会空間に住み、文字どおり「男に喧嘩を売る」のである。

魅力的ではあるものの、本書は日本の女性史、ジェンダー学、フェミニズム、ポピュラーカルチャーその他への新たな批判的洞

察を前面に押し出すという主張を満たしていない。その大きな理由は、この本が暗黙のうちに立脚している「反医学」的批判論である。著者は北米、イギリス、オーストラリアの社会科学文献の動向に沿って、自分の研究を「医師中心の医学」に批判的な論調の大きな枠内に位置づけた。この種の医学は還元的、客観的、非人間的だと言われている。つまり医学知識を独占する医師は、妊娠中の母親が胎児への義務をどう果たすべきかについて規範的処方を出す権限を持ち(著者によれば、こういう権力の持主は大半が男性だという)、その過程で、医師は自分の身体の管理に関する妊娠の発言を、有無を言わず封じてしまう。その結果、日本の妊娠経験は他国と同じように、あらゆる種類の道具や非人間的形態のテクノロジーを通じて、妊婦を出産の身体感情的経験から遠ざけ、胎児の活きた署名 (vital signature) を母親の子宮という閉ざされた空間に還元してしまう。権力の医学モデルが著者の言うように働くかどうかという厄介な疑問は別として(この問題は著者が読者に信じさせたいと思っているほど明白ではない)、言及されているような力の形成が近代に普遍的なものなのか、それとも日本だけに特徴的な社会文化的事象の産物なのかはつきりしない (Osborne 1992)。著者はさらに、父権的権力を医学知識の独占から生じる医師の権威と融合させて、この問題を組み立てている。医師中心の医学は年長の男性の領域だというのが著者の言い分であり、父権

的権力と医師の権威が、胎児にとって何がベストか知っている「彼」の中に融合されているという。父権的日本の伝統という流行後れの形態を医師が体現することもあり得なくはないが、父権主義に動員された権威と権力の関係は機能しないし、著者が近代医学を構成していると考ええる実用知識の近代的形態が用いるのと同じ送電網は使われていない。この問題についても少し明確で陰影のある分析があれば、本書全体の主張はいつそう説得力を持つだろう。

本書でもう一つの意外な欠点は歴史還元主義である。著者は「良妻賢母思想」が明治以来ジェンダー関係を決定してきたという考え方に賛同しているが (pp. 163, 169)、「近代日本の女性性がただ一つの経路で形成された、あるいは「良妻賢母」のような一般原則の上に築かれたと考えるのは、階級、年齢、場所から生じる複数の経験が事実上、封じられてしまう。さらに、女性が文化を伝達するおとなしい存在であることを強調しすぎると、日本女性にはこの手のイデオロギーに抵抗する能力がなかったかのような印象を与えるし、母親性および出産の問題と格闘する多様で多数の二十世紀の日本のフェミニニストを、意図せず歴史から吹き消してしまいはしないか。

こうした留保点はあるものの、この本は楽しく読めるし、思考にとつて刺激的なこの文学ジャンルについて、著者が提起した

テーマをさらに追求したい多くの人を活気づけることだろう。

参考文献

Osborne 1992

Thomas Osborne, "Medicine and Epistemology: Michel Foucault and the Liberality of Clinical Reason," *History of the Human Sciences* 5:2 (1992), pp. 63-93.

(翻訳：朝倉和子 (S W E T 所属))

*本稿は *Japan Review* 32 (2019) に掲載された英文テキストの日本語訳である。